
シンポジウム

論題 中世から近世へ

—— 知のあり方の変容？ ——

司会 京都大学

川添 信介

提題：バロックから見返す哲学史

東京大学名誉教授

坂部 恵

提題：知識人からユマニストへ

—— 15世紀イタリアの知的世界 ——

埼玉大学

伊藤 博明

提題 「スコラ学」における学／哲学としての
神学の誕生

聖心女子大学

加藤 和哉

(於 慶應義塾大学 2006.11.12)

司 会

川 添 信 介

「中世から近世へ」という統一テーマを掲げてきたシンポジウムの最終年であった今年、「知のあり方の変容？」という副題のもとに開催された。1年目は「存在論の変容」、2年目は「法、政治をめぐる思想の変遷」が副題であったが、3年目は特定の研究分野に限定するのではなく、各時代における社会的・思想的布置のなかで、哲学なる営みがどのような位置づけを与えられていたのかを吟味しようとするものであった。そして、今年の副題には「？」が付されている。この疑問符の背景にあったのは、素朴な進歩史観をとることは現在ではほとんど不可能であろうが、それでも中世と近世の間に「断絶」あるいは「不連続」を見ようとする傾向は今でも根強いのではないかという見通しであった。提題者は盛期スコラ哲学、ルネサンス思想、近世哲学をご専門とされる方々であったが、「中世から近世にかけて知のあり方に変容があったのか」という問いに対して、それぞれの立場から解答を与えようと試みられ、シンポジウムの当初の目論見はじゅうぶん実現されたと言えるものであった。

最初に加藤和哉氏が13世紀のバリ大学を中心とした「哲学としての神学」の誕生の意義を語られた。氏は中世の大学での「討論」という形態をもった知の営みに「哲学的ディアレクティケー」を看取し、それがトマス・アクィナスの神学において真性の意味で実現していたとされる。しかし、14世紀以降になると、スコラ神学はディアレクティケーの性格を欠くようになって哲学的活力を喪失し、それこそが近世哲学の批判対象となったのだという見通しを述べられた。加藤氏によれば、近世は確かに中世への批判として出発したし、それは当然でもあったにしても、批判されたのは哲学としての真正さを失ったスコラ学でしかなかったのだ、ということになる。

ルネサンス期についてのきわめて広範囲に及ぶ学殖をお持ちの伊藤博明氏は、プラトン主義的哲学の興隆という論点を中心にしながら、ルネサンスの学者たちが知的な社会の中で占めていた位置を多様な観点から明らかにされた。最新の研究成果を踏まえた氏の主張の核心は、いわゆるユマニストたちの活躍の場は「大学の外」であったという一方的な捉え方への批判であったと言える。フィチーノもフィレンツェ大学で教えていたし、市民に対して語りかけていたのである。硬直した旧態依然たる中世的スコラ学の間としての大学からユマニストは距離をおいていたのだといった断絶の側面だけではなく、「中世的知識人」との連続性をも見なければならぬのである。

中世哲学会会員ではないが近世哲学史の大家として提題をお引き受けいただいた坂部恵氏は、美術史家ヴォリンガーの中世芸術論を援用しながら、哲学の「文体・スタイル」を問題とされた。現代の学術論文的な哲学のスタイルは19世紀に成立したものにすぎず、それ以前にライブニッツやフランシス・ベーコンがそうであったようなバロックの哲学のもっていた別のスタイルを見落とすべきではない。そして、そのバロックは「中世的精神性の最後の輝き」であり、中世スコラの「討論」というスタイルと連続しているとされる。近世はその全体が中世的ではないのではなく、近世哲学の一部だけが非中世的なのだというのが坂部氏の解答であるように思われる。

以上、「知のあり方に変容があったのか」という問いに対する以上の三つの解答は、簡単に統合され一つのまとまったピクチャーとなるものではないであろう。たとえば、加藤氏と坂部氏がともに言及した中世スコラの「討論」の精神について、14世紀からは活力が失われはじめたとすれば、それは何故なのか。また、ルネサンスでは「ディアレクティケー」は再興したと言ってよいのか。考えるべき課題はいつそう広がったと言うべきかもしれない。シンポジウム当日も熱心な討議がなされたが、現在の社会

のなかで哲学という営みが抱えている「苦境」に応答するためにも、わたしたちは今後歴史に学ぶことを忘れてはならないであろう。

提 題

バロックから見返す哲学史

坂 部 恵

1 ヴォリンガーとスコラ哲学

美術史家ヴィルヘルム・ヴォリンガー（1881～1965）は、とりわけその著書『抽象と感情移入』（1908）によってひろく名を知られている。

ヴォリンガーはこの書物で、師リーグルの「藝術意志」にもとづく様式史的研究方法を発展させて、古典ギリシャ、ルネサンスから19世紀にまで受け継がれるいわゆる具象藝術を人間と外界との親密な交流にもとづく「感情移入衝動」の産物とし、これにたいして古代中近東や原始藝術の抽象性を「空間恐怖」的な外界との違和感にたいする防衛反応としての「抽象衝動」に由来するものとする芸術類型論を提示した。

この仕事は、一方で、世紀末以来の「不安の時代」の精神を反映するものであり、また、カンディンスキー、クレーらのルネサンス以来の具象絵画の文法・形式を脱構築する現代抽象絵画、表現主義等の運動と併走するものでもあり、事実ヴォリンガーと『青騎士』のグループなどとの間に個人的交流もあった。はるか後、1960年代の科学史におけるトマス・クーン、人文科学史におけるフーコー、民族学におけるレヴィ＝ストロースらの断絶史観、ないし断続史観の先駆にあたることは、あまり注意されることがない。（クーンは、美術史の先行研究からみずからの着想のヒントを得たことを明言しているにもかかわらず。）

『ゴシックの形式問題』（*Formproblem der Gothik*），1911（中野勇訳『ゴシック美術形式論』，岩崎美術社，1968年）は、『抽象と感情移入』を承けて、同様の様式史的図式を北方ヨーロッパ中世のゴシックの文化様式に適用し、ルネサンス以降の近代美術にたいしてゴシックの復権をはかったもの。主として装飾、美術、建築が当然のことながら研究対象となっているが、最後の三つの章は、それぞれ、「スコラ派の心